東北學院時報

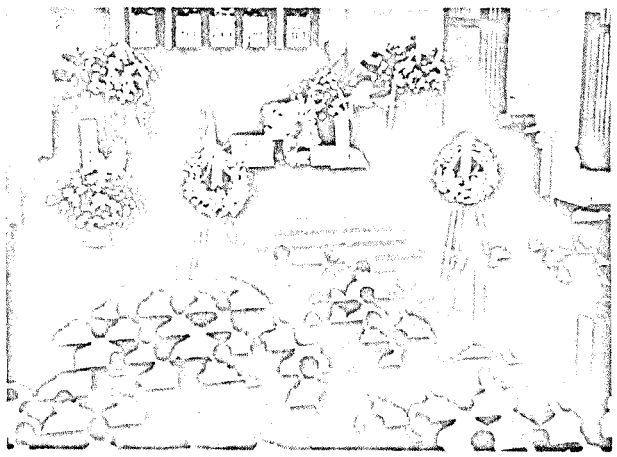
発行所
東北学院同窓会
仙台市南六軒丁1番地
東北学院大学内
電話代表(23)0147番
振替口座仙台883番
編集兼発行人　児玉省三

印刷所
株式会社　佐々木印刷所
仙台市国分町156番地

鈴木義男先生のご永眠を悼む

昭和三十八年八月二十五日、東京の聖路加病院で同窓の友、樋本覚蔵病院長に看取られながら、鈴木義男東北学院理事長は永眠された。行年六十九才であった。

鈴木先生は、明治二十七年一月福島県白河市に孤孤の声をあげられた。白河の地名は古くから奥州みちのくの関門として知られ、また東北地方を河北と呼んだことでもわかるように、東北地方での最南の地点である。鈴木先生は小学校を出られると、郷里の中学校をさしおき、東京とは逆方向の仙台の東北学院を選んで入学された。その理由は、先生の御両親が熱心なキリスト教信仰家で、東北学院の教育方針に深い理解をもたれ、また、院長シュネーダー先生の人格を敬慕しておられたことによったものである。



〔写真〕故鈴木義男先生追悼式（9月14日）

かくて、鈴木先生は、その中学時代を時の東北学院普通科に学ばれたが、その間当時の労働会に入り、中学一年のころから新聞配達や牛乳配達などの労働をしながら他部をされた。しかも学業成績きわめて優秀で、特に文章や弁論に卓越していられた。

学院中学校卒業後、第二高等学校を経て、東京帝国大学法学部に進み、同学部卒業の翌年には文部省より派遣されて欧米に留学、帰国後東北帝国大学教授となられた。

鈴木先生のご生涯における広範な活動の領域は、大体三つに分けることができる。その一は、学者、教育家としての活動、その二は、法曹界における活動、その三は、政治家としての活動である。

学者、教育者としての鈴木先生は、大学卒業後、大正八年東京帝国大学法律学科助手をつとめるかたわら、東京女子大学教授を兼ぬ、その後前述したように文部省在外研究員として留学、帰国後東北帝国大学教授、専修大学教授、青山学院大学教授などの経験を有され、昭和二十六年には同志社大学より法学博士の学位をうけられた。また、昭和四年長崎東北学院の理事になられ、その後ひきつづき長くその任をつかれ、昭和二十四年には杉山氏の後任として財団法人東北学院理事長となられ、二十六年三月学校法人東北学院組織のさいつづいて理事長となられた。

法曹界に入られたのは昭和六年五月のことで、かの有名な帝人事件の弁護にたずさわり、その弁論をもって無罪をかちとられ、後数々の思想問題事犯の弁護をひきうけ、日本の良心の自由、言論の自由のために、時のファッショとたたかわれた。

政治人としては、昭和二十年十一月、日本社会党の結成に参画し、中央執行委員に選任された。昭和二十一年四月には郷里福島県から出馬、衆議院議員に当選せられたのをはじめ前後七回当選し、その間、衆議院帝国憲法改正委員理事となり、民主主義新憲法の制定に努力し、また、日本最初の社会党内閣成立の際には、司法大臣に就任して、民主主義確立のために大きな功績を残された。その後、昭和三十五年一月には民主社会党の結党にあたり、統制委員長に就任された。衆議院議員の間、議院より派遣されて、列国議会同盟に出席することニ度であった。

水眠に際してこのような功績に対し、正三位、勲一等、瑞宝章を授与され、かつ祭祭料を賜わった。

故鈴木先生の葬式は民主社会党主催の党葬として、八月三十一日午後一時から、青山学院大学チャペルで行われた。この日は、暴雨と暴風気味の荒れ模様であったが、葬列参列者約千五百名、チャペルにあふれんばかりであった。

清瀬衆議院議長をはじめ、最高裁長官、民主社会党党首西尾氏など、また、自民党議員など、政界、法曹界の人々が多数参列した。学校法人東北学院からは、小田院長、月浦中学校・高等学校校長、佐藤秀臣大学教務課長が出席し、小田院長が弔辞を捧げた。

九月十四日、学校法人東北学院と同窓会は、大学礼拝堂で、故鈴木先生のための追悼式を催した。

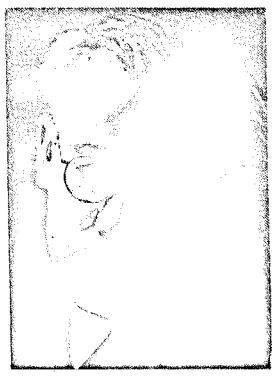
東京から鈴木未亡人とそのご遺族の方々が出席され、鈴木先生の乙友人、同窓会員、教職員、学生など約七百名が、故鈴木先生に哀悼の意を表するために集まった。

式場には、白と黄の菊が飾られ、その清らかな菊花に埋まるように、ややうつむき加減の故人の遺影が安置され、参列者に気軽に話しかけそうな故人の生前の面影をしのばせていた。

仙台市長町教会の小笠原政繁名誉牧師が、「われらの国籍は天にあり」という説教を行なったが、ありし日、鈴木先生と長い間の親交を重ねられた小笠原師による故人のエピソードと、今日に細々と伝わる学院スピリットの原型を思わせる鈴木先生のご生涯は、参列者に深い感動と決意を促した。

追悼式後、午後三時から、押川記念会館で同部学院の司会の下、故鈴木義男先生の「思い出の会」かとり行われ、この席上、親戚を代表して鈴木義臣氏が謝辞を述べられた。

なお、追悼式中の故鈴木義男先生のご略歴については、月浦先生が、また、追悼式辞については小田院長が述べられた。



我らの国籍は天に在り

（故鈴木義男先生追悼会説教）

小笠原政繁

祈、全能の主よ、僕を召されて本日の大役をなさしめ給うことを感謝します。

乞い願わくばこの式典の上に、主の栄光が現われますように。御名によりてアーメン。

ルカ伝一〇章一七節以下で、派遣された七十二人の弟子達が、みな許に帰り「御名」によってなされた素晴らしい伝道の成果を報告し、主もまたこれに答えて、「我天より電光の如く悪魔の地に落ちるを見た。」と、なお言葉をつづけて、「私は君達に敵のあらゆる力に打ち勝つ權威を与えた。それ故君達は悪魔までも服従し得たのである。」「敢えて言うて曰く自に見ゆる伝道の成果に気を奪われてはならん。むしろそれよりも『天に汝らの名の録されたことを喜びなさい』と、訓戒せられた。

云うまでもなく基督者の光栄は、天と地の二重の国籍を持つことにある。地上の国籍は七十年で抹消されても、永遠に抹消されることのない国籍が天に在ることである。

われらの敬愛する鈴木義男先生は素晴らしい七十年の人生の旅路を終えられて、輝く天上の故郷へ凱旋されました。私どもは、これを記念するために今日ここに追悼会を開いたのであります。

私の記憶では彼が十五・六才の頃、すなわち東北学院普通科四・五年ごろと記憶しますが、トーマス・カーライルの英雄崇拝論を引用して、大雄弁を振われたことがある。曰く「雄か現代に英雄なしと言う」と。

彼は文章と弁論においては、特に天賦の才能に恵まれた秀才であった。

大正十一年、すなわち東京帝大法学部卒業の翌年、文部省より派遣されて欧米に遊学した。帰国後直ちに東北帝大教授に栄進し、自他ともに許す新進気鋭の学者となられた。当時私は古川日本基督教会牧師であった。そのころ中央では安部磯雄、吉野作造、鈴木文治氏等により社会大衆党を結成し大正十二年の総選挙に吉野作造氏の女婿赤松克麿君が古川から立候補した際、その応援演説に来られたことがあった。

君が壇上に立つや、「政治は国民大衆の政治でなくてはならぬ、一部特権者の独専に委ぬべきでない。一人の飢える者なく、また一人の過食を貪る者があってはならぬ。泣く者とともに泣き、笑うものとともに笑う政治こそ真の政治であり政治家でなくてはならぬ。実にこれがわが党の政治理念である。どうか赤松君のために一票を願う」と、結ぶや、万雷の拍手であった。私の傍にいた聴衆は、「鈴木先生は基督者でしょう」といわれた。

閉会後、先生に会い、その旁を謝し「君を大学教授にしておくことは国家のため惜しい。野に下って政治家となられては。」と、いうたことがあった。

その後時代は三転した。先生は昭和二十一年の総選挙に天晴れ社会党代議士の栄冠を克ちとり、党内の重鎮に推され、片山・芦田両内閣出現するや司法大臣、法務総裁の栄職に推された。

君はまた一方、教育家として諸大学の教授となり、更に基督教主義学校に深き関係を持つことを忘れなかった。就中わが学院は君の母校であって、その最高責任者として、親の広い経験と専門の学識とを学院経営に反映させた功績は大きいものがある。

先生は前述多忙な政治家であり教育家であるが、多年の過労の祟りとところ遂に病床に伏すること八ヵ月、敬愛する栄養橋大学教授博士の管理する聖路加病院に入院し、優れた医術と手厚き看護もその効なく、八月二十五日六十九才の天寿を全うし遂にこと永眠された。

以上は鈴木義男先生の栄ある六十九年のご生涯であるが、更にこの栄えにもいやまさる光栄が天上に録されてあることを申し上げねばならぬ。

先生のご尊父の名は義一、僧者として漢学に通じ「愛群」と号せられた。齢二十四才のころ医学を志して水戸医学塾に入学、医学を研究中ままメソジスト教会宣教師ヘリス氏より基督教を教えられ、深い感銘を受け、肉体の医師となるよりも心の医師（伝道者）となる決心をして牧師に入り、メソジスト派の諸教会を十数年間伝道に従事された。その間深く感ずるところあって独立自給の伝道が革命なりと確信し、遂に郷里白河町に帰り聖書塾をかねて白河メソジスト教会の牧師として働かれた。

彼はまた江原操六、島田三郎、押川方義の如き基督者諸名士との交厚かったという。先生の名は父の祈により義男と命名され日本国民として百穂塾に登録せられた。

一方、御母の聖として荘厳な婦人の中に尊父（牧師）の手によってバプテスマを受け大の国籍に輝やかに登録された。使徒パウロの言える如く「母の胎を出でしより我を選び別ち恩寵をもて召し給いし者」先生もまた生れながらにして選ばれた神の器である。思うに御両親の信仰と祈が先生の全生涯を支配したのである。「偉大なる敬信仰の力」と讃美せざる能わない。先生の尊父が寄せる期待も大きかったと思う。

そのころ我が思想界を風靡していた思潮は福沢諭吉の独立自尊の精神高揚であった。これに答えて我が押川方義は天祐自助即ち天は自ら助く者を助く先ず自己を全力を挙げて開拓せよ、勤労を尊べ勤労は人間を進み出す青年をして勤労の賜物を発見させんとした。献身犠牲の精神は基督の十字架に在り真の愛国者たらん者は先ず基督を信ぜよ、新時代の日本の救いの力は福音である。先ず東北を英国のスコットランドたらしむることであると叫ばれた。我が愛群先生もこの押川精神にいたく共鳴せられたと見え、しばしば先生と宗教・政治について論ぜられたとのことである。

明治四十年頃シュネーダー院長が白河教会武授伝道に行かれた際尊父を会見し、その際尊父が崇高な院長の人格に接し先生を東北学院に入学させる約束をなされたときいている。

丁度私が年十九才南国土佐を後にして憧れの東北学院普通科第一学年に入学したのが明治四十一年四月であった。六月に労働会に入会した時、君はそこの十三寮室に

十二月十五日（日）午後六時より

南六軒丁一　東北学院礼拝堂にて

キャンドル・サービス

説教「わが目は、はや主の救いを見たり」
牧師　稲垣　好雄

聖誕曲　「メサイヤ」

同窓生、教職員の御家族、学生生徒の御家族、その他一般関係の方々の御来会を歓迎いたします。

（下駄ばきの方は上履きをご用意下さい。）

同窓会委員会

来る十二月十五日（日）午後四時半より大学会議室にて定期委員会を開きますから委員の方はお集まり願います

いた。君は白顔の美少年で、股に首巻を巻き付けて、股部をふくらまし「僕はナポレオンだ。」と大言壮語して歩いたのが印象的であった。

毎朝四時半に師き起され眠い目をこすりながらの新聞配達、君は北山、僕は国分町。寒足に草鞋ばき、腰に胴巻を巻き雪路を走るのは並大抵でなかった。殊に南国育ちの僕は冬の寒さには閉口したが其時何時も僕を勇気付けたのは君達年少者の元気さであった。其頃の労働会の会生は四十五六名と思う。年令十三才から二十才前後種々雑多であった東北学院中学部の中堅で各クラスの指導的立場にいた。一日三時間労働賃金九銭、一ケ月の舎・食費共三円七十銭、朝食は洋麦飯に味噌汁、沢庵二切、昼食夕食は麦五に野菜の煮物か塩引あるいは安価な魚の煮付、それで職人も不平を言うものもなく感謝していただいた。月謝一円二十銭。

舎生は一ケ月四円の送金が必要であった。当時白米一升十三銭であった。

司法大臣鈴木義男先生も労働会時代はこれと同じ生活をなされたのであった。以上幼年期十三年間は牧師の家庭の人となり少年時代五ケ年間を東北学院に過され、その人間像の基礎はここで形成された。爾来五十年基督者として多難の人生を克服し太郎中央教会の会員となり信仰の上も職を賜い、隣人を愛し多くの一談を地上に印して遂に去る八月二十五日を以て昇天されたのである。

故愛する鈴木先生のみ霊に献ぐる唯一の願望がある。天上の消息を夢にでも知らせて欲しいと言う切なる願いである。

われらつつ思うに天上主イエスの御懐に在ます愛群先生夫妻のみ霊と、功なり名を遂げて御国に凱旋した父子の対面光景である。

渾想するだけでも感慨わまって言なく実に「この親あってこの子あり」たがいに抱き合う光景は何に譬えることが出来ようか、羨望に堪えない次第である。

更に恩師シュネーダー院長並に学院関係の諸先生のみ霊も君の凱旋を祝し君の伝える東北学院の消息は地上より贈物として最高の感謝であろう。かくてわが東北学院は天上の諸聖徒の祈りと地上小田院長を頂き聖徒の群れの祈りと奉仕により神の御栄光の御事業として発展して行くであろう。

使徒パウロはピリピ人へ涙を以て訴えた「十字架に敵して歩む者は滅亡である。われらの国籍は天に在る。主が再来の時、信ずる者は『聖化』せられる」との約束を堅く信じ常に希望と歓喜をもって信仰の戦を戦え勝利している。われわれは永日を期し先人の衣鉢を受け継ぐ決意を新らたにし、死にいたるまで主の御栄光を現わす器となりたいものである。アーメン

—仙台市長町教会名誉牧師—